文樂の人形

（七文）

齋藤清二郎

近世の荒物遣ひであつた吉田文三は、熊谷や光秀はいつも白塗で遣つてゐたことを思ひ出す、文三は首に就ては一と見識を持つてゐた。

例外はあらうが文七の白塗説に、わたしは賛成である。

寫眞説明

圖版の文七は文七首のうちで、特に優れ、文樂首中での國寶級のものである、これは幸ひ戰災を免れた。（撮影　安原仙三氏）

首は必ず二つ

近世までは人形芝居の首を新たに打せるときは必ず二個づゝ造つてゐたものであつたらしい。その理由は他にもあらうが、ひとつには、狂言の立て方が現在は興行時間の關係や、觀衆の興味等で時代世話を交へて一段物を四本も五本も立てるのが例になつてゐるが、以前は一興行に一本乃至二本の通し狂言の上演であつたので同じ系統の首が二つ乃至それ以上に入用の場合が多かつた。

（寫眞1）

また、立者の人形遣になると自分の持役でも大序や序切に（太夫がみす内で語るとき）は、弟子達

小さい首を大きく遣ふこと

近世の大立者であつた初代の吉田玉造は「小さい首を大きく遣ふのが、それが藝だ」と云つた。

文七は白塗のもの

文七は文樂首のうちで、立役の座頭格に遣ふ首である。この文七と云ふ首は元來白塗が定法となつてゐる。白塗は立役の場合には、善良な性根のものに塗られ、薄卵色に塗ると性根が何となくボケて迫力が妙に弱くなる。勿論太夫の語り口に依つて、塗色を變へると云ふ場合もあるが、近頃は例へば太十の光秀や、陣屋の熊谷などは、すべて薄卵に塗つてゐるが、これは歌舞伎の影響ではないであらうかとも考へられる。

（2 眞寫）

（3 眞寫）

（4 眞寫）

に黑衣で遣はせて滅多に序切や二段目あたりまでは出なかつたのが常識であつて、自分の持ち役の首を妄りに弟子達には遣はせたりはさせなかつたことも、そのひとつの理由だとも解釋される。

扨て、戰災前の話であるが、初代玉造舊藏の丸目の鼻と云つて老け役首のうちで、豪放で皮肉な時代の老將もの（例、忠臣藏の師直、盛綱陣屋の北條時政、布引の瀨尾等）に遣ふ輪廓の大きく、大膽不敵な相貌を備へた文樂以外に類型を見ない生粹の文樂傳統の首があつた。

ところが、これと同類型のものが昔から文樂座に二個保存されてゐて、何れも名作であつたことは、豫て文五郎老から聞き及んでゐたが、他のひとつは、古くから所在不明であつたのを、わたしは秘かにその所在を探索してゐたところ、圖らずも近頃某氏所藏のものに、それを發見した。それで一度文五郎老に首實驗をさせようと思つてゐる。

他にも一つ二つ例にとると、金時と云ふ首がある、これも圖版で示すやうに、二個保存されてゐた。これは文樂首のうちで最もグロテスクな面相と強い迫力を持つた稀に見る古格のあるいゝ首であつた、役柄は寺子屋の玄蕃、陣屋の梶原などの武荒者型の敵役に遣ふと素晴しい効果をもつてゐた首である。

（5 眞寫）

誰が創作したのであらうか、わたしの調べたところでは、これ許りは文樂獨特のもので、他にあまり類型を見ないものであつたがこれも戰災で燒失した、今後は玄蕃や梶原は團七系統の所謂丸　もので間に合すであらうが第一迫力と性根がまるで違つてゐる。

また、圖版で示す斧右衞門系統のちやり首も二個兄弟として保存されてゐた、これは毛谷村に用ひる斧右衞門や、帶屋の丁稚長吉などにも類用して遣つてゐた。

寫眞說明

1は文樂座舊藏の丸目の舅、2は某氏所藏の新發見の丸目の舅、3・4は文樂座舊藏の金時、5も同じく文樂座舊藏の斧右衞門。

（撮影　安原仙三氏）

內匠かしら

內匠は立役の惡人の性根に遣ふ首である。

現在文樂で遣つてゐる口あき文七（口のあく仕掛になつた文七首のこと）と云ふのは、內匠かしらの部類に加えて差し支へないであらう。

內匠の名稱は彥山の京極內匠からその名が出てゐる。忠臣藏の定九郎や、志渡寺の森口源太左衞門、躄の仇討の瀧口上野などは、いまは文七を遣つてゐるが、昔は內匠かしらであつた。惡の性根を表すには內匠かしらを遣ふのが本格であらう。

首は人形遣のもの

首は近世までは、主として人形遣が所藏してゐたもので、現在のやうに座本（興行主）が持つてゐたものではなかつた。

即ち、初代の吉田玉造は數百を算する名　の首を所藏してゐて、當時の植村文樂軒に賃貸してゐたことは、あまりにも有名であるが、一方文樂とは反對の彥六座の吉田兵吉や吉田辰五郎なども良い首を數〻く所藏してゐた。その他どんな下つ端の人形遣でも、それ相應に自前の首を所有してゐたものであつた。

左遣ひのこと

昔は主役の人形遣ひを助ける左遣ひにも、名人が相當にゐた、どんなに立者の人形遣ひでも左遣ひや、足遣ひが拙劣では、すぐれた技倆も生れない。

先代の桐竹紋十郎には桐竹龜三郎や吉田玉龜などの左遣ひの良き補助者があつたことは見逃せないことだ、ほかに玉朝、光ルなどもあつた。

先年歿くなつた吉田玉米は現文五郎老の左遣ひとしては、至藝の人であつた。女形の左遣ひとして、實に良く主遣ひを生かした。せめて玉米の在世中にこのことを發表して玉米の左遣ひとしての良さを認識してもらいたかつた。